

## 茨城県のコメ作りを開発途上国の技術者に指導 —人生の生きがい、生涯の活動—

国際協力機構 筑波国際センター  
外来講師 三浦喜美男

### ◆経歴◆

1948年：福島県に生まれる  
1970年：海外技術協力事業団(現国際協力機構)  
2009年：海外農業開発協会  
2014年から：国際協力機構筑波国際センター外来講師

### 1. はじめに

国際協力機構(以下、JICA)の活動は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど開発途上国の技術者における人材育成です。

JICAは専門家やボランティアの派遣、研修員の受け入れ、日本のNGOなどによる草の根の技術協力のほか、技術移転のための機材供与を行っています。

私は、海外ではインドネシア(ボゴール農科大学)、エジプト(米作機械化センター)、ボリビア(JICA事務所)、パラグアイ(日本人移住者支援)、東ティモール(農業政策)で活動しましたが、48年間の開発途上国援助の中で、約30年間は筑波国際センター(以下、TBIC)において、開発途上国の稲作分野の研究者、普及技術者の指導を行ってきました。

現在、私は茨城県のコメ作りを開発途上国のアジアやアフリカ諸国などの技術者に教えることを「人生の生きがい」にしています。本稿では私の経験を紹介したいと思います。



■茨城県のコメ作りを海外に伝える講義風景  
(写真提供:筆者)

### 2. 茨城県の稲作を体験で伝える

茨城県には国の農業研究機関をはじめ、県の農業研究センター、農業普及センター、農協などがあり、開発途上国の研修員に対する稲作技術研修の地としては恵まれています。

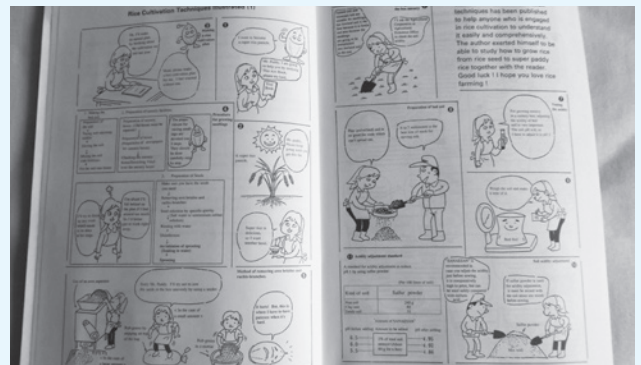
開発途上国の研修員が求める日本での稲作研修の内容は、実践研修(Practical oriented)です。

理論は母国でも学べるという考えです。

そうしたことから、稲作研修コース開設当初から、TBICにおいては圃場での実証(実験)・実習が中心に行われています。

### 3. 茨城県のコメ作りの指導法

TBICの稲作技術研修は、3月から10月までの7カ月間、10名前後の研修員を集団で受け入れています。研修は講義が30%、圃場実験・実習・視察が70%でプログラムが組まれます。



■「絵で見るコメ作り12カ月」の英文テキスト  
(写真提供:筆者)

私は、稲栽培技術の講義を行っていますが、講義では、茨城県の普及技術として利用された「絵で見るコメ作り12カ月」のマンガ(上図)を英語に翻訳し、研修員の指導に役立てています。

それに加えて、茨城県の稲作農家が持っている「稲作こよみ」も併せて活用しています。

また、昨年から、研修員が帰国後にTBICで技術指導したことを役立ててもらうため、Power Pointで稲栽培に関する資料を作成したり、パソコンを活用した短編映画作りを指導しています。映画は5分から10分程度です。これにはヒット曲の「花は咲く」や研修員の母国の歌を取り込んでいます。

短編映画のプロデューサーは研修員です。映画作りが少しでも前に進むと、プラクティスとして発表の機会を与えました。研修員の中には、「私

はパソコンが使えない」「英語が出来ない」と言っ  
て、不安な姿勢を示してしまう者もいますが、パ  
ソコンも英語も徐々に上達し、映画も制作するこ  
とができました。

この指導法は「参加型研修」といい、研修員は  
退屈しません。研修員自身がPower Pointの作成  
と短編映画の企画から発表まで行うため、非常に  
やり甲斐もあります。

私は「教えることは学ぶこと」の精神で外国人  
研修員の指導に携わっています。教室で彼らと議  
論すると、研修員から想定とは違うリアクション  
が出て、面白いです。また、彼らの国々の稲作を  
学ぶことも少なくありません。



■制作した映画の発表（写真提供：筆者）

昨年、TBICで研修を受けた研修員から、「私の  
所属機関でPower Pointと映画を利用し、帰国  
報告会を開催しました」とメールで連絡がありま  
した。開発途上国の農村の識字率は、国や地域に  
よって異なりますが、あるところでは30%と著  
しく低く、稲作技術を確実に農民に伝授するには、  
マンガや稲作こよみ、映像などが不可欠です。

#### 4. 帰国した研修員たち

下記に示したものは、稲作研修を受けて帰国し  
た研修員を訪ね、現地でインタビューした結果の  
一部とメールでの情報です。彼らの姿勢は変化し、  
母国で活発に活動しています。

- ① TBIC で学んだことにより、自信を持って農民に稲  
作技術を指導できるようになりました（タイ）。
- ② TBIC で取り上げた稲の栽培試験を、帰国後リピート  
して試験を行っています（タイ、バングラデシュ）。
- ③ 稲作の知識・技術は全くありませんでした。TBIC  
で初めて稲作を学びました。TBIC で技術指導をし  
て頂いた皆様に感謝しています（アフリカ諸国）。
- ④ 研究者・農業普及者などが出席したセミナーで、  
TBIC 研修を発表しました（セネガル）。
- ⑤ 母国で稲作技術を更に深化させ、学位（博士号）を  
取得しました（イラン、エジプト）。

⑥ TBIC での研修の結果を踏まえ、研究所で稲の研究を  
行ったところ、所属機関から表彰されました（フィリ  
ピン）。

⑦ TBIC で学んだ「塩水と生卵を使った種籾選別法」は  
今では、タンザニアのキリマンジャロを中心として稲作  
農家に普及しています。これは、TBIC で学んだ研修  
員が技術普及したものです（タンザニア）。

#### 5. つくばでの思い出

TBICで学んだ研修員は、つくばでの思い出を  
綴っています。参考のため、その一部を紹介します。

##### 1) 子供たちの行儀

小学生が給食の時、列を作り自分の順番を待ち、  
給食が全員に行き渡ってから食べ、非常に行儀が良  
いことに驚きました。また、授業が終わると全員で  
教室の掃除をすることに好印象を受けました。私の  
国では、子どもが掃除をすることはありません。

##### 2) 田んぼに子どもがいない

私の国では若い人が農業をしています。子供たち  
は学校が終わって家に帰ると農業を手伝います。日  
本の田んぼでは、子どもの姿をまったく見ることが  
できません。不思議な感じがします。

##### 3) 筑波山に登りビックリ

筑波山に登ってビックリしたのが、山頂に広場が  
整備され、ビルも建っています。そして店もあり、  
飲み物や食べ物まで売っています。私の国ではその  
ようなところはなく、とても信じられません。

#### 6. おわりに

1961年に開始されたJICAの稲作技術の研修員  
は、おおよそ80カ国の地域で1,500名に上り、  
TBICとその前身である内原国際農業研修セン  
ター（現 水戸市内原町）で受け入れています。

私が指導した研修員は、この約半数です。研修  
員と接したことで、英語が話せるようになり、さ  
らに彼らの国々の稲作技術も学んで、つくば市の  
稲作を指導してきました。

拙稿で、茨城県のコメ作りを開発途上国の技術  
者に指導することを「人生の生きがい、生涯の活  
動」と書いたのは、JICAを停年退職してからも、  
継続して開発途上国の研修員の指導を行っている  
からです。

長く同じ仕事をやっているからという意味では  
なく、この仕事が一番好きで、苦がなく、生きが  
いを感じているからです。帰国した研修員は、「つ  
くば市は第二の故郷、もう一度行きたい」とメー  
ルで伝えて来ています。